



を求めて

関西大社会安全学部
の試み

安全学は、一般にはまだ耳慣れた言葉ではない。「安全学の構築に向けて」と題した平成12年の日本学術会議・安全に関する緊急特別委員会の報告書では、「工学的なアプローチだけでは安全問題に対応することは困難になってきている。従来の安全工学の枠を超えた、より広い立場から安全問題に対処する『安全学』の構築が必要」と指摘されているが、今日でも協力しやすい領域間の連携にとどまったままだ。

「安全工学の枠を超えた、より広い立場」は、20世紀終盤の現代科学技術文明への大きな反省の動きと無関係ではない。現代文明は歴史的には、西洋近代的科学思想の発展を背景に、経済性と利便性を中心とした科学技術を中核とする独特の文明となっている。

現代のいわゆる自然災害やリスク由来の「人災」的事故、事変や戦争が現代文明のありさまと深く関係する限り、「広い立場」は、近代科学思想が捨ててきたものを反省的に再評価できる視座に移ることでもある。

現代文明は分析に強いものの、総合的体系に弱く、価値評価尺度も単一である。そのままでは「わかっている知識の部分的集合」以上にはなり難く、また、専門別の詳細知識は、構造的全体の中の位置づけを見失って同質的偏見の束と化し、目先の問題を解決しても別の厄介な問題を作りかねない。

これを避けるには、少なくとも、大きな歴史の流れの中にこれまでの現代文明を位置づける程度の鳥瞰(ちょうかん)的視座が必要であ

辛島恵美子NPO理事(安全学研究)



かのしま・えみこ

昭和24年生まれ。東京
大大学院工学研究科博
士課程単位取得退学。
三菱化成工業、三井情
報開発(株)総合研究所を

経て昭和62年安全学研究所を設立。専門
は安全学研究。現在NPO法人安全学研
究所理事。今年4月、社会安全学部・大
学院社会安全研究科教授に就任予定。

文明を開く安全学の構築

る。専門領域のそれぞれの知識に適切な有機的位置づけを与えるには、前提的な白紙地図づくりに近い作業も欠かせない。

わずかなりとも、分かっていないことの自覚も大切なのである。

さらに、社会は同質の目的や価値観ばかりで構成されているわけでもない。例えば、信号機のない交差点を事故なくスムーズに通行するための「公平で合理的なルールの策定」と、利害や価値観の対立する他者への思いやりが基礎となる「臨機応変なルール尊重の力量」が欠かせない。

学の充実・展開と現代文明の安全のためのかじ取りの基礎となることが、今、安全学に期待されているのである。

＝おわり



本シリーズは今春出版予定です。次回からは「関西防災」にタイトルを変え、河田恵昭教授と安部誠治教授による、自然災害と事故対策をテーマにしたコラムを掲載します。